

## 新しい詩教育の理論

足立悦男氏の詩教育に関する著作はこれが三作目で、氏自身の言い方に従えば、「実践研究」「現代詩の授業」昭和53年、教材研究「国語教材研究・詩篇」小沢俊郎氏との共著、昭和56年）を経て、やっと原理論にたどりつくことができた」（あとがき）ものである。本書は前二著と違って、雑誌等に既発表の諸論文を下地にしている。しかし読み通してみ

ると、いくつかの論文の寄せ集めという感じはせんせんしない。書き下ろしのような感じがする。それは、本書に集録する段階でかなりの手入れがしてあるからでもあろうが、何よりも足立氏の課題追求の姿勢が一貫している事によるものである。その姿勢がテーマと方法とを明確に浮き出させて、読み手をぐいぐいと引き込んでいくのである。

氏の詩教育三部作が、実践研究→教材研究→原理論という筋道で成立したという事は興味深い。というのは氏の提唱する「見方の詩

教育」という理論は、実践や、教材の見方に対する切実な問題意識に基礎を置いているからである。例えば、本書には以下のような鋭い指摘がいくつも見られる。「何となく味わった気分になるというのが、情緒主義の詩教育の特色である。叙情詩教材はとくに、この弊に陥りやすい。」(17ペ)「詩教育における技術主義とでも呼べるこの傾向は、情緒主義の傾向とともに、詩教育の中で克服されねばならない課題である。」(20ペ)「教科書の詩教材には性と死の二つの素材的なタブーのあることを指摘しているが、日常性にひそむ暗い部分をえぐる作品もまた、暗黙のうちにタブー視されてきた傾向がある。」(26ペ)「詩人の主体性を子どもたちの位相にあずける童心主義の発想は、つねに甘いオプティミズムに陥る危険性をはらんでいる。」(69ペ)「作品の歴史的(ここでは、近代俳句史における)価値というものと、教材価値とを混同しては

ならない。」(73ペ)「詩の中で教えられること、教えられないことを見きわめた上での、いわばまる鬻りの詩教育といった立場が想定される。この点を従来の鑑賞指導論は、意外と見逃しがちであった。」(110ペ)など。

このように、足立悦男氏の詩教育論は実践や、教材の見方に対する鋭い問い直しから出発している。それだけにともすれば先鋭化しやすいくらいはあるものの、ユニークで生き生きしたものとなっているのである。

本書はまた、多くの先駆的な提案をしている。紙数の関係でその二、三を紹介すると以下のようである。

本書のタイトルは「新しい詩教育の理論」である。「新しい」は直接には「理論」にかかるとは。しかしそれだけではなく、「新しい」は同時に「詩」にもかかるといふ所にこの論の特徴がある。氏の言う「新しい理論」すなわち「見方の詩教育論」は、「新しい詩」すなわち「読み手の認識をゆさぶるようなもの」の挿え方をしている詩」を発見することに支えられている。例えば六歳の子の「いぬ」(いぬは／わるい／めつきはししない)という詩に、氏は「大人の読者をして畏怖せしめるだけの

認識の形」(53p)を見出し、これを教材としてとりあげるのである。すなわち氏の言う「新しい詩」とは、教材としての価値という観点から吟味された詩である。

教材としての価値という観点から詩を見るという氏の姿勢の根底には、「詩を教える」という教育観から「詩で教える」という教育観への転換がある。西郷文芸学の研究者としても知られている足立氏は、西郷文芸学の最近の展開を「を」から「で」への転換と位置づけているが、氏の詩教育論は、西郷文芸学研究の中で見出した視座の発展であるように思われる。

西郷文芸学との関連で言えば、氏の言う「見方」という事自体が「視点論」の応用と見られなくもない。従来の詩解釈が、描かれていることがらの世界への目を向けていたのに対し、氏の「見方の詩教育」は、そこにとがらを見つめている詩人の目に着目しているものだからである。

このように本書は、足立氏の実践的な鋭い課題意識と、西郷文芸学の理論的研究との結合による成果として生まれたものである。

本書には足立氏自身のユニークな実践もの

せられている。授業のねらいが面白い。氏は川崎洋の「するめ」という詩を素材に、「詩の生まれるときに立ち合うこと」をねらいとして授業を展開する。「いわゆる鑑賞指導が、既成の詩教材から出発するのに対して、このばあい、『詩に行きつくまで』を授業の中心に置」(41p)く。授業は展開法で進められる。先ず黒板に「するめ」とだけ板書される。氏は「するめ」という言葉から、パツとひらめく常識的なことを五つばかり書いてみてくれませんか。」と要求する。そして何人が発表させた中から、「かむほど味が出る」という発言が出てくると第一連の「かめばかむほど」

／なんて／俗なお世辞はよしてくれ。」という詩句を板書して生徒の常識をくつがえそうとする。次に、「イカは飛ぶだろうか」という発問をして生徒の発想を飛躍させようとする。このように、次々に常識をくつがえし、発想を飛躍させる事を通して終連の「するめを一枚晴れた日に／思い切り／飛ばしてやってくれないか。」にこめられた詩人の思いに到達させていくのである。氏の理論の一端を鮮やかに実現させた授業である。

本書の構成は以下のようになっている。

まえがき、序説 詩を教えることから、詩で教えることへ、I 日常性の詩教育を目指して(一)、日常が詩に変わるとき、二、裏側から詩をのぞく試み、三、言葉の亀裂との出会(い) II 詩の教材論のために(一)、詩・短詩型教材の条件、二、詩教材研究の視座と方法、三、作品論と教材論の接点、III 詩の指導論のために(一)、詩が教える位相、二、詩を教える位相、三、詩で教える位相、四、比喩—像的認識の機能、IV 詩の原理論のために(一)、詩とモチーフの原理、二、詩とイメージの原理、三、詩とリズムの原理、あとがき

「見方の詩教育論」をめぐることは、「教育学国語教育」(明治図書、一九八三、六六)、「文芸教育」(明治図書、42号)で論争がなされてもいる。(A5判、一七〇ページ、昭和五八年八月、明治図書刊、一、七〇〇円)

(藤原 和好)